

# 私の先生

林芙美子

青空文庫



私は十三歳の時に、中国の尾道おのみちと云う町でその市立女学校にはいった。受持ちの教師が森要人と云うかなりな年配の人で、私たちには国語を教えてくれた。その頃、四十七、八歳位にはなつていられた方であつたが、小さい私たちには大変おじいさんに見えて、安心してものを云うことが出来た。作文の時間になると、手紙や見舞文は書かせないで、何でも、自由なものを書けと云つて、森先生は日向ひなたぼっこをして呆ぼんやり眼をつぶっていた。作文の時間がたびかさなつて、生徒の書いたものがたまつてゆくと、作文の時間の始めにかならず生徒の作品を一、二編ずつ読んでは、その一、二編について批評を加えるのが例になつた。その読まれる作品は、たいいてい私のものと、川添と云う少女のもので、私の作品が、たいいていは家庭のことを書いているのに反して、川添と云う少女のは、森ふくろうの梟おとろとか幻想の虹にじとかいったハイカラなもので、私はその少女の作品から、「神秘的」など云うおとろくべき上品な言葉を知つた。

十三歳の少女にとつて、「神秘的」と云う言葉はなかなかの愕きであつて、私はその川添と云う少女を随分尊敬したものだ。——森先生は、国語作文のほかに、珠算を時々教えていられたのだが尾道と云う町が商業都市なので、課外にこの珠算はどうしてもしなけれ

ばならなかった。私の組で珠算のきらいなのは、私と川添と云う少女と、森先生とであったので、たいていは級長が問題を出して皆にやらしていた。

森要人先生は、その女学校でもたいした重要なひとでもないらしく、朝礼の時間でも、庭の隅すみに呆んやり立っていられた。課外に、森先生に漢文をならうのは私一人であったが、ちつとも面倒がらないで、理科室や裁縫室で一時間位ずつ教えを受けた。頭の禿はげあがつたひとで、組でもおぼろ月夜とあだ名していたが、大変無口で私たちを叱しかつたことがなかった。

秋になって性行調査と云うのが全校にあつて、毎日一人か二人ずつ受持ちの教師に呼ばれて色々なことをたずねられるのであつたが、私たちはまだ一年生で恋人もなければ同性愛もなく、別にとりたてて調べることもないのであつたが一人ずつ呼ばれた。私も何人めかに呼ばれて、森先生は呆んやりした何時いつもの日向ぼつこのしせいで「どんな本を読んでいるか」とたずねた。私は『復活』と『書生かたぎ』と云うのを読んでいと云つたら、すこし早すぎるとそれだけであつた。

森先生は、私たちが二年になると千葉の木更津中学きぎらつへ転任してゆかれた。めだたないひとだったので誰も悲しまなかつた。先生の家族を停車場へおくつて行ったのは生徒で私ひ

とりであった。私はそれからも、その先生の恩に報いるため、母にねだっては時々名物の餚玉あめだまを少しばかり送った。(坊ちゃんや二、三人あったように記憶していたので)暫くしばらくして、私たちの国語の教師には早大出の大井三郎と云うひとがきまった。まだ二十四、五のひとで、生徒たちにたちまち人気が湧き、国語や作文の時間が活気だってきた。夜なんかも、この先生の下宿先きには上級生たちがいっぱい群れていた。私はこの先生に文章ぶんしょう倶楽部くらぶと云うのを毎月借りていた。大井先生はまた私に色々な本を貸してくれた。広津和郎ひろつかずおの『死児を抱いて』と云う小さい本なぞ私は愕きをもって読んだものであった。

ある日、昼の休みに講堂の裏で鈴木三重吉すずきみえきちの『瓦』と云う本を読んでいた。校長がぶらりとやって来て、此様な社会の暗黒面を知るような本を読んではいけないと云った。私は大変いい本だと思えますと云うと、そのあくる日の朝礼の時間に、校長がひとくさり、小説の害を説いて降壇すると、その後若い国語の大井先生が「小説を読むふとどきな生徒がいることは困ったことです」と登壇された。私は首をたれていたが、この若い教師の言葉をそのときほど身に沁しみみて考えたことはなかった。その『瓦』と云う本は大井先生に借りていたものであった。森先生に伸のび々とそだてられていた私は、小説を読むことをそんなに害とも思わなかったし、学校で読んで悪いことも、そんなに気にしていなかった。

それからと云うもの、私はこの若い国語教師にうつすらと失望を感じ尊敬を持たなくなつた。学校へは一切小説本を持ちこまなくなつたかわり、勉強もおろそかになつてしまつて、三年四年となるにつれて、私はせいせきが段々悪くなつて、卒業する時は八十七分の八十六番位で出たと思う。国語も作文も図画も乙ばかりだった。

その時の校長を佐藤正都知と云つた。私の家族はその頃尾道の近在を行商してまわつていたので、学校から帰つても誰もいながつたし、家の前のうどんやで、毎晩、私は夕飯を食べるようになっていた。一ヶ月分の金があずけてあつて、夕方になると私はそのうどん屋の細長い茶向台で御飯をたべた。ある夕方、私は御飯をたべてこのうどん屋から出かけると、ちようど遅く学校から帰つて来ていた校長に逢つた。その翌日、学校から母へ呼び出し状が来たがこの忙がしいのにそれどころではない、面倒なことを云われたら止め<sup>や</sup>めてしまえとそのままになった。私は学校中でもない部類の生徒になつて、しまいには、何かが無くなつても私にかぶせられた。新らしい上草履<sup>うわぞうり</sup>を買つてはいていると、受持ちの図画の市河と云う教師に呼ばれて、その草履は誰それのものではないかと云われた。私は朝、自分でその草履を買つたばかりで名前を書くひまもなかったが、教室へ帰ると、その時ばかりは学校へ火をつけてやりたかつた。その草履については、母が、お前の身分とし

ては竹の皮の表でよいと云うのを無理矢理八錢ほどはまらせて、たたみおもて 畳表の麻裏を買ったもので、あとで、同組の生徒が告げ口したと云うことを聞き、その生徒の前で怒鳴ったことがあった。私は、仲のいい友達がひとりもなかった。川添と云う少女とは組が別れて、私は英語の多い級にいたのでめつたに逢えなかった。

私は一年生の時は百人の組くらすで十一番であったが、卒業する折は、満足に卒業出来るかと心配した位で、好きな学課は、地理と英語と国語と歴史と作文と図画であった。どれも乙ばかりで、三、四年の頃好きだった図画も乙ばかりだった。図画の宿題には、講談倶楽部か何かの口絵を描いて来る少女が一番いいせいせきで、私のように静物や風景を写生してゆくのは、何時いつも乙か丙をくれた。今考えだしても学校時代は何の愉たのしみもなかった。私は、あんまり女学校時代のことを書かないけれども、森先生以外にはなつかしいと思う先生がひとりもない。卒業も出来かねた私を卒業さしてくれたのは大井先生だと云うことを同組くらすのものに聞いたことがあったがこれはうれしかった。卒業写真に、私は黒木綿もんつきの紋付もんつきを着てうれしそうに写っているが、これは下級生の紋付を借り着かして行きったもので母もその当時は、卒業出来るのなら工面くめんしてでも紋付を造ってやったにと云い云いした。

この学校を卒業して十三、四年になるが森先生は木更津の中学校にいまだにいられるか

どうか、私はそれきりお逢いしたことがない、いまでは老齢になっていられることである。私はこの先生にだけは逢いたいと思っている。



# 青空文庫情報

底本：「林芙美子随筆集」岩波文庫、岩波書店

2003（平成15）年2月14日第1刷発行

底本の親本：「林芙美子全集」文泉堂出版

1977（昭和52）年

「林芙美子選集」改造社

1937（昭和12）年

初出：「文芸首都」

1935（昭和10）年4月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：岡本ゆみ子

校正：noriko saito

2008年3月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 私の先生

林芙美子

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>